

| | | | | |
|------|-------------|----|-------|-------|
| タイトル | 籐工芸～編んでつくる～ | | | |
| 学校名 | 松戸市立松戸高等学校 | 工芸 | 氏名 | 鈴木友理子 |
| 教材費 | 700～1000円 | | 実施時間数 | 20時間 |

1. ねらい

私たちの身の周りにはたくさんの種類の編組工芸がある。竹や蔓植物を用いて作られる「容器」やバッグが一般的だが、最近はクラフトテープを用いた編組工芸の本も多数出ていて静かなブームとなっているようである。

細い蔓を編むだけで立体的な籠ができる感動、基本をマスターすると工夫次第で思い通りの模様、形の容れ物を作ることができる。この課題を1年生の早い時期に体験させるのだが、素朴な工芸の技法に触れ、簡単そうに見えて意外と思通りの形には編めないこの課題は、集中力を身につけ、達成感を味わわせることができる。

2. 材料・用具等

籐丸芯 2mm または 2,5mm (1kg 単位で購入できる。丸めて納品されるものより、まっすぐなまま束ねて納品されるものが使いやすい)

定規、ハサミ、千枚通し、洗面器や小振りなバケツ、あればエンマ

クラフト染料 (籐は編む前に 5~10 分水につけて軟らかくするが、これにクラフト染料を混ぜて色水にしておくと籐が染まる)



編みかけの作品は窓際や網の上など、日当たりがいい・風通しがいいところに保管する。

籐の長束を置いてある。生徒はここから一本ずつ引っ張り出して使って使う。

始めから短い籐や、堅芯の残りは、とっておいて長短堅芯として使う。

3. 展開

(1) 《練習》見よう見まねで小さい籠をつくる (10 時間)

はじめは、全員に同じ長さ・本数の材料を渡し、「どうすると籐で籠が作れるか」を理解するために、完全に指導者の作るのを「見よう見まね」で作る。本校では、書画カメラとプロジェクターを使って指導者の手元をスクリーンに写しながら一緒に作っている。そのような道具がない場合は、ポイントポイントで生徒を集めて実演により解説する。

編み進めていくうちに、堅芯がどのように広がっていくか分かるように、堅芯を染めて使うとよい。

なるべく短時間で作りたいところだが、

- ◎小物入れとして使いやすい大きさ・形であること
- ◎小さくても、底を編み進める間に「増芯」すること
- ◎底を編み終わったら、堅芯を直角に立てて

区切りを付け、わかりやすくすること

など、このあと各自で設計して大きい作品を作るときに使える編み方を教えておく。

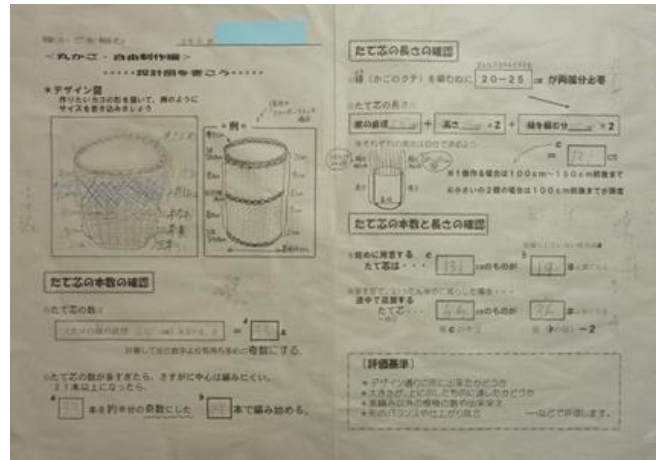


初めての籠は、底の中心に大きな隙間が出来たり、底から側面に移る時に上手く立てられず、「ざる」のようになってしまう生徒もいるが、この《練習》をしておくことで、「自分で設計して作る《本番》」の籠を作るときに、とても上手くなる。

(2) 《本番用の設計をする》(2時間)

作りたい籠の直径・高さ・模様編みなどを書き込むと、何cmの堅芯を何本用意すれば作れるかが計算できるプリントで、「作りたい籠」を設計する。ここで、どんな籠でも自由に作れることを知る。

学校によっては一から自分で設計するのが難しい生徒もいるので、技法書や指導者が制作しながら撮った写真などで作り方を示し、「見本どおりに作る」ことも選択肢に入れてもよい。この場合も、仕組みを理解するため、設計プリントを使うとよい。



(3) 《本番》(10時間)

- ①底の編み方は米字組だけではない。十字組や井桁組、また、編み芯一本で編むだけでなく、追いかけ編みや縄編みで進める方法もあるので、必要に応じて個別指導する。
- ②側面に移ってからの模様編みは、できあがった物を見ただけでは「どう編んだらその模様になるのか」分からないのが基本なので、指導者が事前に研究しておく必要がある。
*生徒に人気なのは・・・素編みのほか、縄編み、矢羽根編み、矢来編み、掛け編みなど。
- ③籠の縁の綴じ方にもいろいろな種類があるが、難易度が同レベルの1～2種類に限定しておく、混乱しない。



(4) 《2年次修了制作～5つの課題から選択》(20時間)

設計から制作まで、すべて自分で行う。1年半ぶりにかごを編むが、あまり質問はしてこない。黙々と作っている(戦っている)。一講座につき数人なので、塩基系染料に浸して籐を染色する選択肢も与える。



基本を理解していれば、楕円形の籠の理解も苦勞はない



生徒の感想

●修了制作は一番初めに工芸のおもしろさを教えてくれた籐かご作りにチャレンジしました。

一度経験していることもあって「前回より難しくて凄い作品を作ろう」と思いました。デザイン画を描いているときも「どういう編み方をしようか」と考えるのも楽しかったです。デザインをするのも工芸の楽しみの一つです。

失敗もありましたが、「どう修復しようか」「それをどう活かせるか」という発想を持つことができるようになりました。

そして、そんな困難を乗り越えて作品が完成した時の達成感は、やっぱり気持ちよかったです。



工芸室の
ゴミ箱も
生徒作品

※作品と感想文の作者は一致しません

●授業を通して、集中することの大切さを学びました。特に1年の時に作った籐かごで集中する大切さを学びました。なぜなら、籐かご制作はほとんど同じ「あむ」という作業の繰り返しで、しかも少しゆるい所を作ってしまうと全体のバランスが悪くなってしまうので集中しなくてはならない場面が多々あったので印象に残っています。良いものを作るためには苦労や努力をすることが身につきました。・・・ゼロからのスタートでしたが、自分の思い描く理想の作品を作るためには何度も失敗しながら良い作品に近づけていく・・・面倒になったりすることも何度もありましたが、作品が完成すると今までの努力がむくわれたという気持ちになり、そこに工芸の授業のおもしろさ、楽しさがあると思います。

●苦手なことでもやってみること、試してみることで発見があり、発見があることで楽しくなり、結果的に良い方向に行く・・・。考えて考えて挑戦して、とくに誰が助けてくれるわけでもない、その点人生と似ているところもあるのかも・・・。失敗がどうしても怖くなる工芸ですが、あえてそこに立ち向かう必要性を感じました。

《評価》

集中できたかどうかが直接作品の「出来」に現れる籠を作ることで、失敗を乗り越えたり自分の気持ちと向き合う力をつける。工夫する（考える）爽快感を感じる。そして、さまざまなことに立ち向かう勇気を身に付けている。

4. 指導上の留意点

籐かごは単純そうな課題に感じるが、さまざまな工夫をさせたり、見本に忠実に編むようにさせたり、学校ごとのレベルに合わせていかようにも工夫できる。

工芸Ⅰで基本の編み方を行い、工芸Ⅱの中で選択課題にするなどして底が丸いものだけでなく、教科書「工芸Ⅱ」の「織物」とリンクして四角い底のもの、楕円のもの、把手（籐でもできるが革で作ってもよい）を付けたもの・・・と、工夫の幅を広げられる。

練習作品を作らせることについて、はじめは時間の無駄かとも思ったが、生徒の成長ぶりが予想以上だったので、毎年続けている。

自由なデザインで設計させると、「簡単に作れるデザイン」に流れる者もいるので、「大きさの最低ライン」を決め、逆に「無理する者」もいるので、「授業の中でできる最高ライン」も決めておく。

側面の模様は、どの高さにどんな模様を入れるか決めさせておくが、編みながら実物を見て臨機応変に「バランスの良さ」を感じとり、変更も受け入れる。

5. 資料・参考文献

『籐を編む』（日本ヴォーグ社）※絶版になってしまいました